# 墓制からみた中国地方の縄文社会

山　田　康　弘*

Burial custom at Chūgoku district in Jomon period.

Yasuhiro YAMADA

キーワード：縄文時代・墓制・社会構造・中国地方

## はじめに

これまで縄文社会に接近を試みるにあたり、墓地・墓域の分析は極めて有効な方法論として認識されてきた。しかし対象となる社会の具体像を描くためには、墓制論や集落論および生業論等を個別独立的に語るよりも、むしろこれらをリンクさせて総合的に議論した方がより蓋然性の高い結論を得ることができるはずである。このような視点から、これまで筆者は中国地方の縄文社会を復元するにあたって、墓制論だけではなく様々な立場からのアプローチを試みてきた（山田 2001a・2001b・2002a・2004a・2004b・2008 など）。本稿でも墓制論にこれらの研究成果を加味させながら、地域社会のあり方について私見を述べることとしたい。また中国地方においては、上部施設や装身具および副葬品のあり方などといった死後付加属性から明確な分節構造を読み取ることは現状ではできないことから（山田 2004b）、ここでは主に墓相互の空間的位置関係を問題として取り上げることとする。なお、各遺跡における墓の認定方法は、山田 2004 b に準拠することにしよう。

### 墓地・墓域の類型的理解

墓制論には様々な概念が存在する（山田 2007）。まずはその整理をしておこう。

墓から得られる情報の各々のことを埋葬属性と呼び、個々の墓を個別墓と呼ぶ。また集落内において住居跡と位置的に分離ないしは重複しながらも、ある程度の数の墓が一定の空間を占地する場合、この場所を墓域と呼ぶ。これに対し、遺跡が墓およびそれに関連すると思われる遺構のみで構成される場合、この遺跡を墓地ないしは墓地遺跡と呼ぶ。

さて、これまでの研究においては、墓地・墓域内に確認される人骨の集中地点や墓の群在地点を指し示す言葉として、埋葬小群ないしは埋葬区という語が使用されてきた。

埋葬小群とは春成秀爾によって提唱された概念である（春成 1980）。春成によれば、これは林謙作の埋葬区にほぼ該当する単位であるとされている。林は埋葬区について、墓地・墓域内においては「遺体が一様な分布をしめすのではなく、数体もしくは十数体を単位としたかたまり」が存在すると述べ、このかたまりを埋葬区と呼ぶとしている（林 1977）。また林は、この埋葬区の占取・用益の主体が世

*島根大学法文学部准教授

帯であると推定している（林 1979・1980）。これに対し春成秀爾は、抜歯や合葬例などの分析をもとに身内と婚入者は埋葬小群を異にしていると推定し、墓地・墓域内にはいくつもの埋葬小群が存在することから、一対の埋葬小群が「集落内のそれぞれ特定の場所に何世代にもわたって建て直された一棟の竪穴住居つまり一世帯の歴史の一部に対応する」と述べている（春成 1980）。

厳密に語義を検討するならば、林のいう埋葬区と春成のいう埋葬小群とでは、指し示す内容が異なる。しかし林のいう埋葬区の語義には「あらかじめ何らかの原則、もしくは計画にもとづいて設定された区画」（傍点筆者）という意味が含まれており、現実の「かたまり」のあり方を表現するにはいささか定義が厳密であるし、春成のいう埋葬小群の語義には、本来的に身内と婚入者という出自の意が内在されているので、「かたまり」そのもののあり方を議論するためには、いささか使いにくい。そこで筆者は、林も指摘するように、墓地・墓域においては遺体（墓坑）が一様な分布をしめすのではなく、考古学的事実として数体もしくは十数体を単位とした埋葬例の数的最小単位としての「かたまり」が存在することを認め、この「かたまり」を埋葬小群と呼ぶことにしたい。ここで定義する埋葬小群とは、墓が群在化している状態そのものを指し示す語である。したがって埋葬小群という語は、ある埋葬属性によって括ることのできる共通性を適宜付加させながら、その内容を個別に規定することも可能であり、個別具体的な「かたまり」のあり方を記述するには都合が良い。また、墓地・墓域内には複数の埋葬小群が群在化して、さらに一つの大きな「かたまり」をなしている場合も存在する。この大きな「かたまり」を、埋葬群と呼ぶことにしよう。この場合、埋葬群中に入れ子状の構造として埋葬小群が存在することになる。

このように整理すると、墓地・墓域と埋葬群、埋葬小群の関係は、墓の数的規模からみて以下のようになる。

墓地・墓域⊇埋葬群⊇埋葬小群⊃個別墓

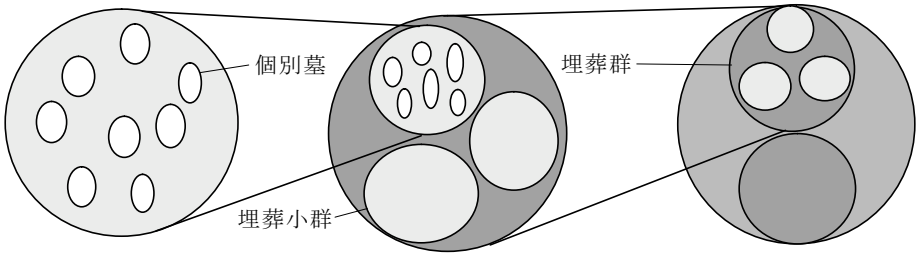
上記の区分に従えば、逆に墓地・墓域とは墓が群在化した埋葬小群が存在する場所と定義づけることも可能であろう。この場合、縄文時代における墓地・墓域のあり方は以下のように整理できる（第１図）。

パターン A）墓地・墓域内に埋葬小群が一つしかないもの。埋葬小群＝墓域という関係である。墓が群在化している状況のみを表す。

パターン B）墓地・墓域内に複数の埋葬小群が確認できるもの。複数の埋葬小群＝墓地・墓域という関係である。墓地・墓域内に分節構造をみることができる。

パターン C）墓地・墓域内に複数の埋葬群が存在するもの。複数の埋葬群＝墓地・墓域という関係で捉えることができる。各埋葬群中には複数の埋葬小群が内在し、各埋葬群中に入れ子状の構造が確認できる。このことは墓地・墓域内に重層的な分節構造が存在することを指し示している。東日本の大規模環状集落や大規模な墓地・墓域において、しばしばみることのできるパターンである。

墓地・墓域に反映された社会のあり方は、基本的には A→B→C の順に複雑なものであったと想定できる。また墓地と墓域では、墓の




**第１図　縄文時代の墓地・墓域の類型**

設営場所が集落と分離・区分されているという点から、墓地の方が総じて社会的複雑化が進行している可能性を考えてよいだろう。この類型的パターンを踏まえて、中国地方における墓地・墓域のあり方について検討を行なうことにしよう。

**中国地方における縄文時代の墓のあり方**

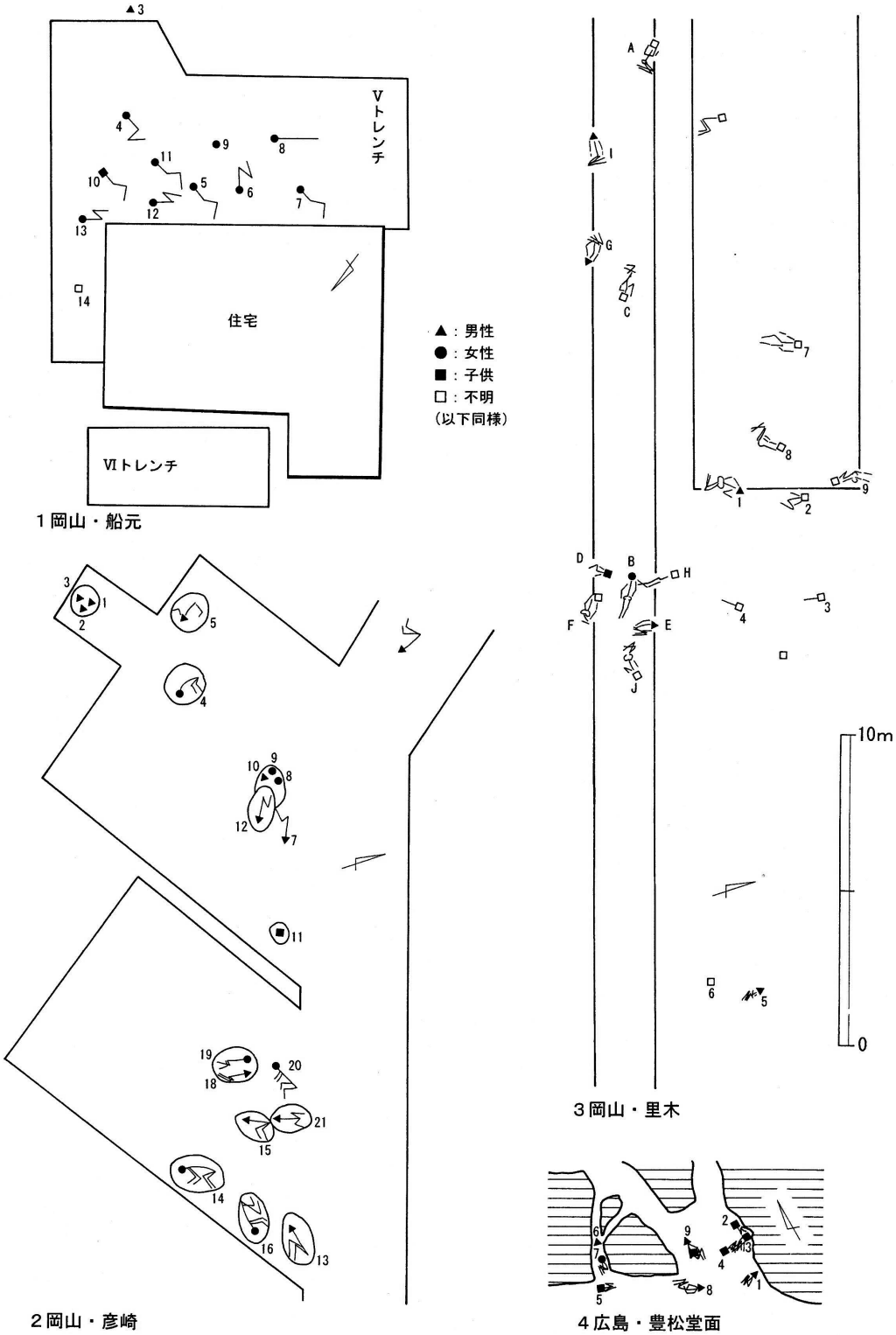
人骨がある程度の数まとまって出土しており、確実に墓地・墓域を形成していると判断できる遺跡としては、広島県大田貝塚（前～中期、清野 1969・潮見編 1971）、帝釈寄倉岩陰遺跡（後期、戸沢他 1976）、帝釈猿神岩陰遺跡（晩期、川越 1978）、豊松堂面洞窟遺跡（後期、川越他 1976）、岡山県船元貝塚（中期、清野 1969）、津雲貝塚（後～晩期、清野 1920）、彦崎貝塚（前・後期、池葉須 1971）、里木貝塚（中～後期、間壁・間壁編 1971）、船倉貝塚（前期、鍵谷編 1999）などをあげることができる（第 2～5 図参照）。これらの遺跡は帝釈峡遺跡群を除き、いずれも山陽地方瀬戸内側の貝塚地帯に所在する。

これに対して日本海側の山陰地方では、まとまった人骨出土例は報告されていない。わずかに島根県サルガ鼻洞窟遺跡と小浜洞窟遺跡においてその可能性が知られるが（佐々木他 1937、山本 1967）、残念ながら考古学的な情報が欠落しており、検討対象とすることはできない。

人骨は出土していないものの墓地・墓域が形成されていると捉えることのできる事例、あるいは散発的ではあるが墓と考えることのできる事例としては、島根県板屋Ⅲ遺跡（晩期、角田編 1998）、下山遺跡（後期、深田編 2002）、貝谷遺跡（後期、神柱編 2002）、平田遺跡（後期、坂本他編 1997）、原田遺跡（勝部他編 2006）、家の後Ⅱ遺跡（晩期、中川他編 2005）、林原遺跡（後期、久保田他編 2007）、鳥取県上福万遺跡（早期、長岡編 1985）、松ケ坪遺跡（晩期、森下 1996）、山口県御堂遺跡（水嶋編 1990）、広島県陽内遺跡（中期、稲垣編 1999）、岡山県久田原遺跡（晩期、弘田編 2004）などが挙げられる。

この他にも集落内において単独で検出される、あるいは散発的な分布をする土坑が検出される遺跡は数多く存在する。これらの土坑の多くが墓であったと考えるならば、中国地方における墓のあり方は次のようなパターンとして類型化できるだろう。

類型１（単独墓型）：集落内に墓が単独、もしくは散発的に存在し、群在化する傾向がみられないもの。墓地・墓域が形成されていないと考えられる事例である。



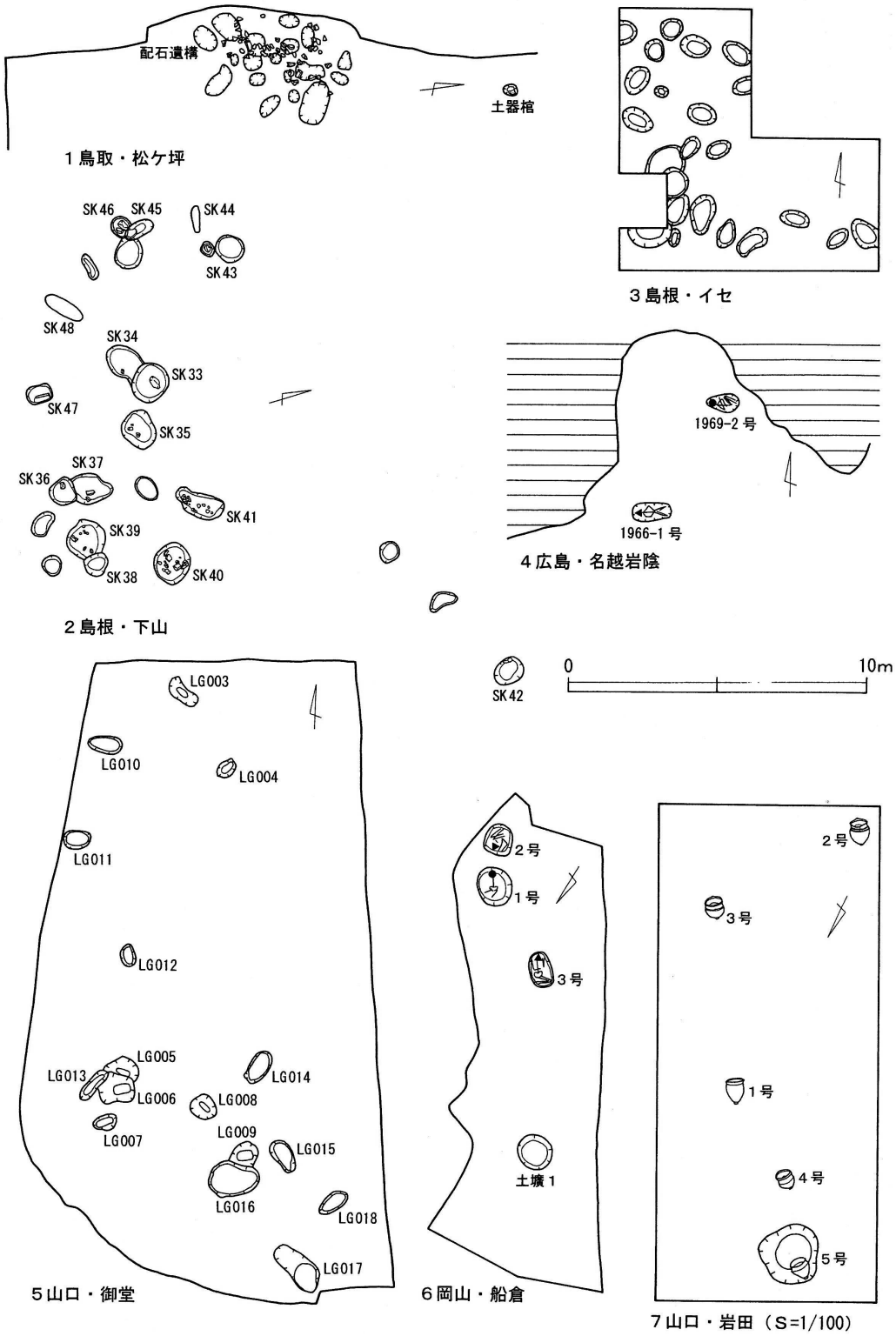

1 岡山・船元

2 岡山・彦崎

3 岡山・里木

4 広島・豊松堂面

第２図　中国地方における墓地・墓域の諸例（1）




第 3 図　中国地方における墓地・墓域の諸例（2）

島根県貝谷遺跡や林原遺跡をはじめ帝釈名越岩陰遺跡など、多くの遺跡がこれに該当する。

類型２（単独埋葬小群型）：複数の墓が存在し、群在化する傾向のあるもの。全体の状況から墓地や墓域を形成していると考えられるが、内部に空間的な分節構造は確認できず、一つの埋葬小群＝墓地・墓域の形態をとるもの。先のパターンＡに該当する。岡山県船倉貝塚・船元貝塚、広島県陽内遺跡・豊松堂面洞窟遺跡、鳥取県松ヶ坪遺跡・上福万遺跡などがこれにあたる。

類型３（複数埋葬小群型）：墓地・墓域内に複数の埋葬小群が存在し、分節構造が確認できるもの。先のパターンＢに該当する。岡山県里木貝塚や津雲貝塚を代表的な事例としてあげることができる。また、岡山県久田原遺跡、島根県板屋Ⅲ遺跡・家の後Ⅱ遺跡、山口県御堂遺跡などもこれに含まれるだろう。

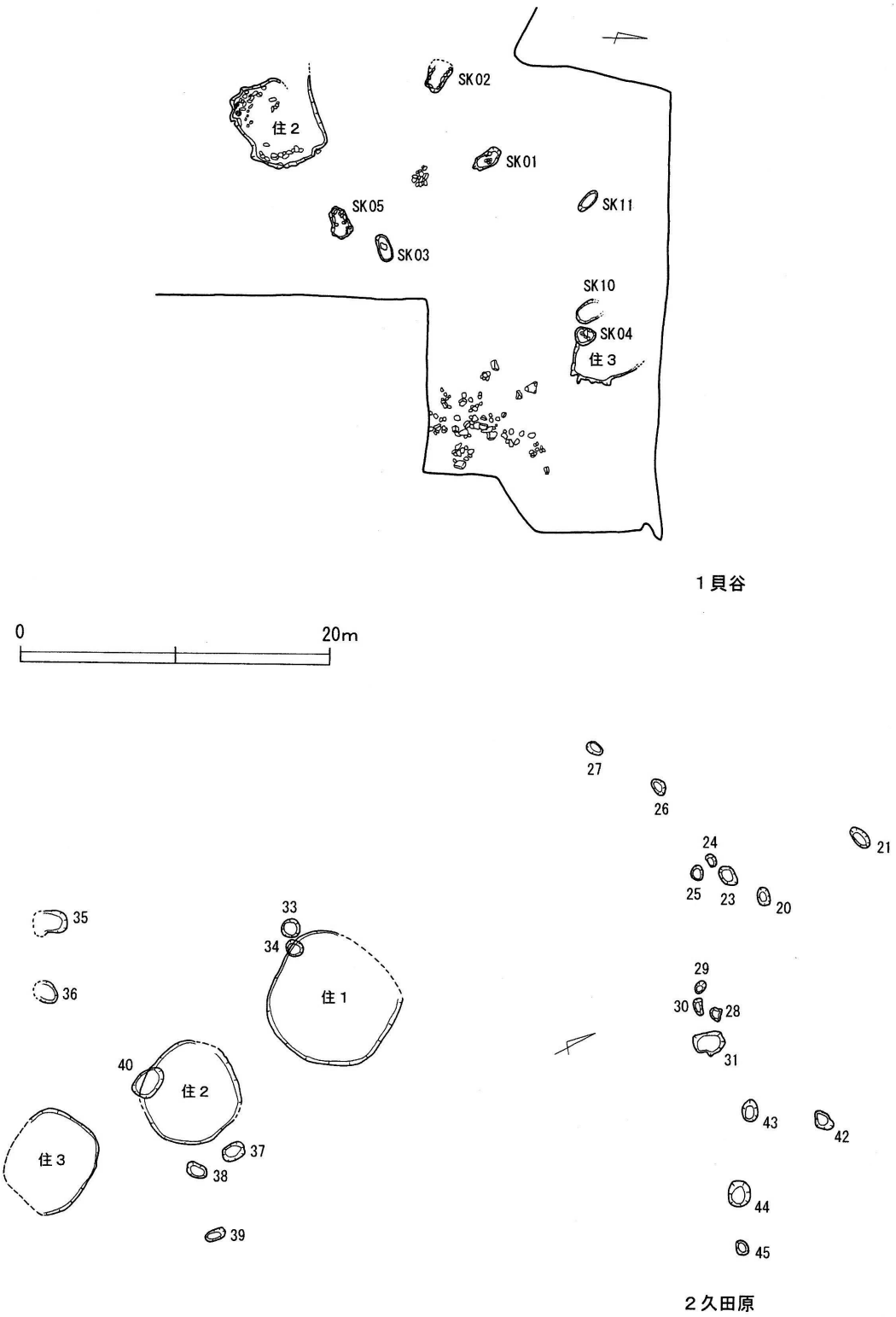
これら類型1〜3の時期的なあり方としては、類型１が全時期を通じて存在する一方、類型２と類型３では後者の方に晩期の事例が多く、類型３の方が後出するようである。基本的に墓のあり方は、類型1→類型2→類型３という流れで捉えることが可能であろうが、実際にはすべての墓域がこのような単線的な複雑化過程を経ているのではなくむしろ共存しており、時期を追うごとにそれぞれの類型が付加されていくというのが実態である。なお現状では、明らかにパターンＣに該当する事例は存在しないと言えるだろう。その意味では墓制からみる限りにおいて、中国地方における縄文社会は、東日本の特に中期以降のそれと比較した場合、相対的に複雑なあり方を示すものではなかったと判断できる。

**墓地・墓域と集落の対応関係から想定される社会のあり方**

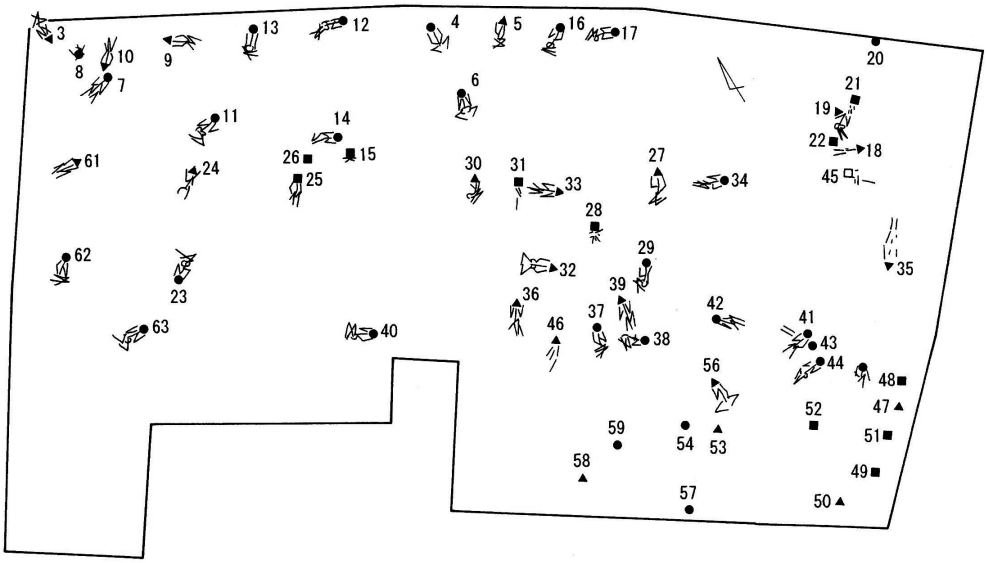
かつて筆者は中国地方における縄文集落のあり方を概観し、当該地方の縄文集落のあり方は住居が２ないしは３棟程度からなり、その人口も 10 人を大きく超えるものではないと述べたことがある（山田 2002a）。また、中国地方における埋葬小群は、出土人骨の分析結果から血縁関係を軸に構成されたものとして捉えることができ、津雲貝塚や里木貝塚、彦崎貝塚などにおける埋葬小群の規模が 5〜15 体前後であることと先の集落規模を考えあわせると、各々の埋葬小群が各集落の構成員の埋葬地点であったと理解できるとした（山田 2002a）。さらに、これまでの検討によって、埋葬小群は小家族集団ないしは世帯の歴史の一部を表すものと想定できることから（山田 2001c・2002a）、中国地方の縄文集落は一つの小家族集団ないしは世帯によって構成されていたと把握されるだろう。その場合、中国地方における縄文集落と墓のあり方の基本的な対応関係は次のようになる。

一小家族集団＝一世帯＝一集落単位≒
一埋葬小群（⊆墓地・墓域）

各集落が単独で類型１や類型２といった墓ないしは墓地・墓域を残すことは十分に考えられる。しかし、たとえば津雲貝塚のような複数の埋葬小群を内在させるような類型３の墓地・墓域を小規模な集落が単独で残すことは可能だろうか。ここで集落のあり方を再吟味しておこう。

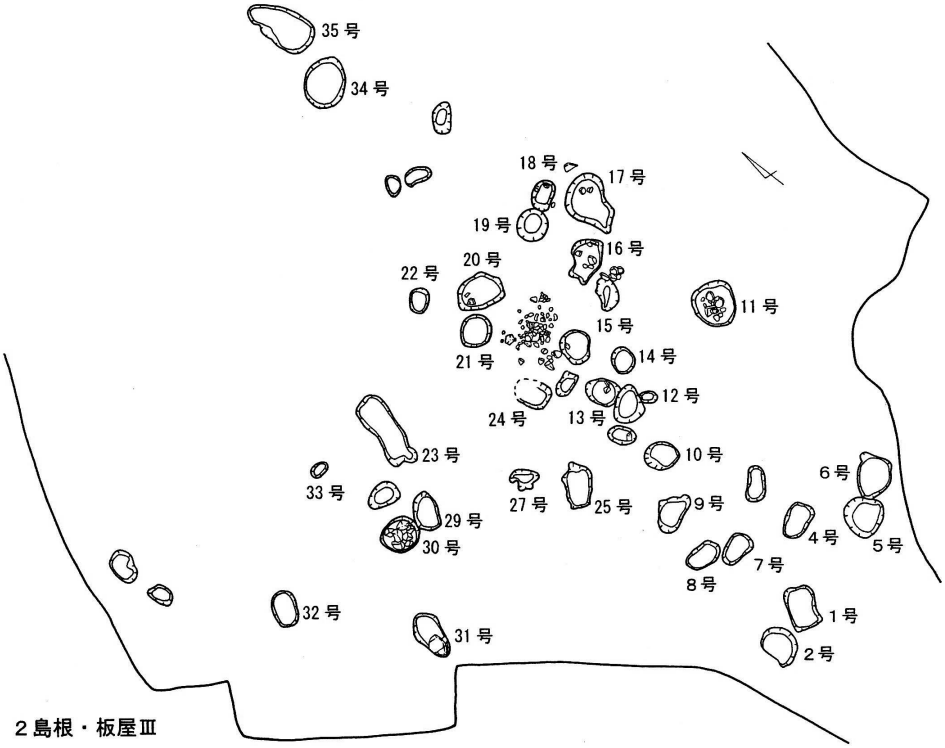



第4図　中国地方における墓地・墓域の諸例（3）



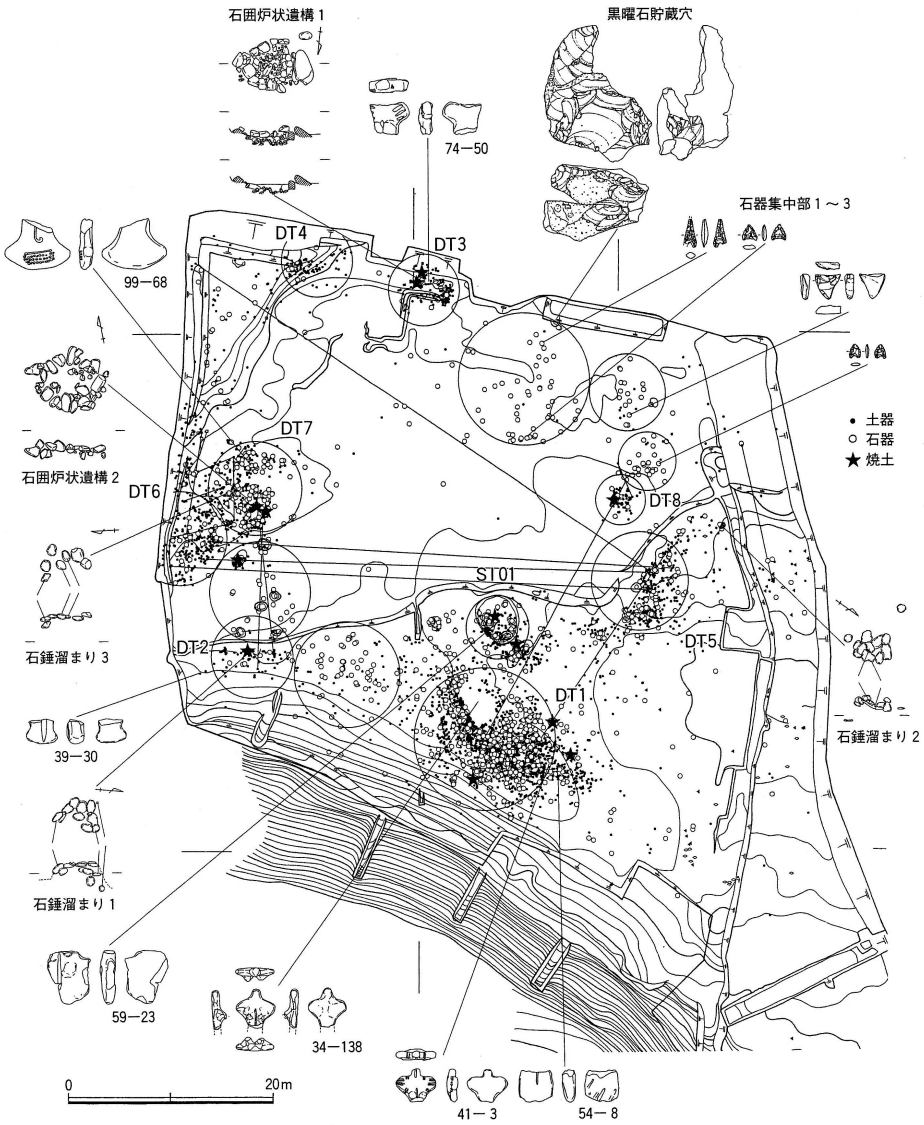

1 岡山・津雲

0 10m




2 島根・板屋Ⅲ

**第５図　中国地方における墓地・墓域の諸例（4）**




**第6図　林原遺跡における土器溜まりのあり方**

筆者が2002年に上記のような集落のあり方を想定した後、稲田陽介は島根県林原遺跡における土器溜まりのあり方から、当時の居住形態について興味深い見解を提示している（稲田2007)。稲田は、林原遺跡の土器溜まりの範囲内に硬化面や焼土が存在することからこれらを住居であったとし、林原遺跡においては最低9棟の住居を認定することができるとともに、これらが環状にならぶことから林原遺跡は環状構造をもつ集落であったと述べている（第6図参照)。また各土器溜まりに時期的な連続性が確認できることなどから、居住空間の重層的利用が想定できるとも指摘している。その一方で想定される住居構造が脆弱なことから、協業作業の必要性から季節的な集合が起こった状況を指し示しているものと理解できるとしている。

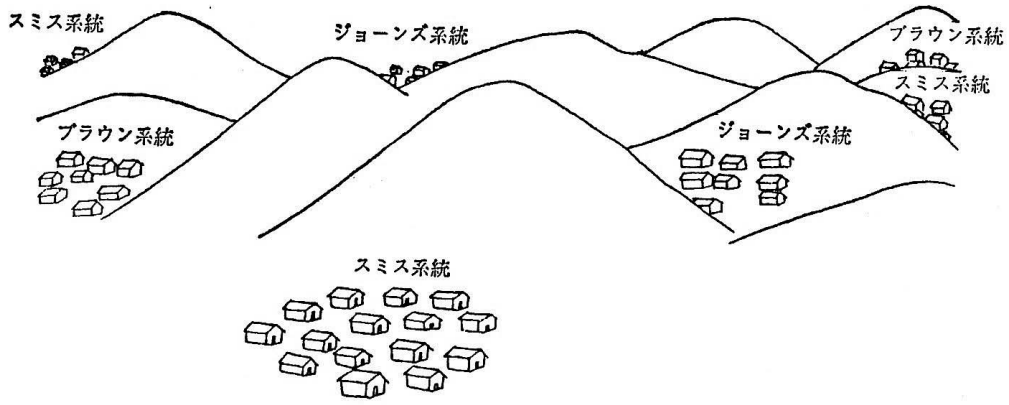
一時的集落景観として9棟もの住居が環状

に並ぶ集落というのならば、それは西日本においてかなりの規模の集落となるに違いない。しかし土器溜まりを住居とした場合でも、土器型式レベルの検討から、同時に存在しえた住居の数はせいぜい3棟程度であったと考えられること、および林原遺跡においては墓が単独ないしは散発的に存在する類型1の形態をとることを考えると、実際の一時的集落景観におけるその規模は筆者が想定してきた中国地方の縄文集落のあり方と大きく異なるものではなく、やはり長期における大規模な人口集中は想定できないだろう。むしろ稲田自身も言及しているように、季節的な回帰的移動サイクル内における冬季以外の時期の居住地点と理解した方が良いのではなかろうか。ただし稲田は、該地の多くの後期集落が住居1棟のみで構成されるとしており、その意味では住居3棟を持つ林原遺跡において複数集落の合成が行なわれた可能性は依然として残る。もし、これを肯定して良いのならば、山田2002aにおいて予見していた集団の離合集散の一側面を確認できたことになり、当時の居住形態や集団構造が極めて柔軟な側面を持っていたことを裏付けることになるだろう。稲田の解釈の当否はひとまずおくとしても、季節などの諸状況に対応して各集落が一時的に離合集散した可能性は、林原遺跡の事例からも否定できないことになる。

ところで、先に中国地方の縄文集落は小家族集団・世帯によって構成されていたと述べた。本来家族とは血縁性に基づく集団紐帯の構造的単位であり、世帯とは生業活動および消費活動における機能的単位である。したがって、中国地方の縄文集落の場合、基本的には集落が構造的・機能的な一集団単位として存在していたことになる。しかし、これらの集落は個々に独立して存在が可能な訳ではない。集落内で必要とされる最小限の物資や資源などは自己調達が可能であったかもしれないが、少なくともサヌカイトや黒曜石などの遠隔地産物資の入手時などにおいては、他の集落の人々と接触があったはずである。また集落間によっては、婚姻による人的資源の交換が行なわれたりしたこともあったであろう。ちなみに、当時の交易のあり方をモノ対モノの物々交換のレベルにとどまっていたと考えるのは間違いである。交換の対象となるものはモノ以外にも人や情報といったさまざなものが想定されるべきであろう。これは豊富な民族誌を渉猟すれば簡単に了解できることである。

さて、小規模集落は様々な場面で機能的な部分もあるが、人口数が少ないという点で、集団維持の観点からすれば本質的な弱点を内在させている。自己の子孫を残してゆくことが生物の本能である以上、それが人の場合であっても自己ならびに自己の子孫の消失、ひいては自己が帰属する集団の絶滅は極力回避すべきことであったに違いない。したがって、このような小規模集落間では、必ずや何らかの相互扶助が行なわれていたはずである。その相互扶助の論理的根拠が、婚姻・出産によって発生する血縁的紐帯であった可能性は高い。

個々の独立した集落が、様々な面で相互扶助を行ないながら連携をとりあっている。それが中国地方における通時的な縄文社会のあり方である。しかし、中国地方のように全体の人口数そのものが少ないと想定される一定の地域内において（小山1984、山田2002a・2008）、小規模集落間で婚姻が繰り返された場合、各集落内、および集落間の構成員の大半が何らかの系譜的血縁関係を有するという状況が起こりうる。先に述べたように、想定される相互扶助と連携がこのような血縁関係に基づいて行なわれている可能性は高いとすれ




一つのコミュニティが単一の出自集団の成員（とその配偶者）で構成されている。地縁的にまとまった各出自集団は、他の集落にまたがる出自集団の一つの分節にあたる。たとえばスミス系統で構成された一つの集落は、他のスミス系統の集落と出自を共通にした関係にあり、また親族と通婚の紐帯でまわりのブラウン・ジョーンズなどの系統の集落と結びついている。

**第７図　キージングの分類によるタイプ２の集落と出自集団のあり方**

ば、一集落を構成する小家族集団・世帯を包摂する、より規模の大きな血縁集団がその背後に存在したと想定するのは妥当であろう。この場合の大規模血縁集団は、共通の血縁原理で統合されているという点から、基本的にはリネージやクランといった出自集団とオーバーラップするものと考えることができる。林原遺跡などにおいて推定される集落の離合集散は、全くの非血縁関係にある集団がランダムに行なったと考えるよりも、この出自集団が基礎的紐帯となって行なわれたものと考えた方が自然である。そのように考えたとき、このような集落のあり方は、キージングのコミュニティモデルでいうとタイプ２にあてはめることができるだろう（キージング 1982、第７図)。中国地方における縄文社会のイメージとしては、同じ出自集団の構成員が複数の集落に分散して居住しているという状況を描くことができよう。

その点を踏まえて類型３の墓地・墓域を考えてみることにしよう。先にも述べたように類型３の墓地・墓域内には複数の埋葬小群が確認でき、この埋葬小群内における被葬者が各集落の構成員であった可能性が高い。これらの諸状況を勘案すると、類型３は同じ出自集団を構成する複数の集落が集合して形成された、いわば出自集団の墓地・墓域であると考えることができるだろう。

## おわりに

以上、墓制と集落のあり方をリンクさせながら、地域社会のあり方について私見を述べてきた。類型３の墓地・墓域の成立要因としては、直接的には出自集団という紐帯の結束が強化されたことが大きく、その発現形態の一つとして墓地・墓域の形成とともに 4I 系・2C 系という集落構成員を二分するような抜歯習俗の発達があったと筆者は見ている。しか

し、その結束が強化された理由とメカニズムを解明するには至っていない。

なお春成秀爾は津雲貝塚出土人骨にみられる抜歯を検討して、これを自集落出身者と他集落出身者という「ムラ出自」を表示するものとの見解を提出している（春成 1979）。抜歯は生前付加属性であり、かつ不可逆属性であることから、それが表示したものは個人だけでなく社会的にも非常に重要なものであったことは間違いない。また津雲貝塚では 4I 系・2C 系という抜歯系列が性別と結びつく傾向が非常に強く（春成前出、山田 2002b）これが男女にまつわる何らかの社会的表示であった可能性は高い。先にも暗示したように、筆者はこれが春成とは違う意味での出自集団を表示していた可能性を想定している。中国地方全体が非常に人口数の少ない状態にあったのならば、そこに存在した出自集団が基本的に二つであったと考えることも可能性としては許されるだろう。その場合、同一の埋葬小群内には本来の出自を異にする人々があわせて埋葬されていたことになる。このことは当時の社会が外婚制をとっていたと考えれば容易に理解できるだろう。

また晩期においても類型 3 以外に類型 2 が存在することは確実であり、各集落内部および集落間のあり方に応じて、出自集団の統合レベルが地域ごとに異なっていた状況が想定できる。このことは、各出自集団内に小地域に対応するサブ・クラスターが存在していたことを指し示すのかもしれない。また同時期の類型 1 については、集団統合の表徴と考えるよりも個別的な理由を想定する必要があるだろう。これらの問題を今後の課題としつつ、縄文時代の社会が単線的な複雑化を経るのではなく、環境や集団の状況などの要因によって、単純化と複雑化を生起させながら有機的に変化・持続していったということを見通して述べて本稿を閉じることにしたい。

## 付記

私が島根大学へ赴任してからはや 10 年が過ぎた。本稿はこの 10 年間、私が中国地方の縄文時代社会について考えたことのまとめでもある。10 年前の教官公募時に渡辺先生が私を選んでくださらなかったら本稿は存在しないし、また現在の私も存在しなかった。当時渡辺先生と一面識もなかった私がはじめて渡辺先生とお会いしたのは、島根大学への赴任が決まった後のことであった。今から考えれば、論文と若干の抱負だけで私という人間を判断したのであるから、非常に勇気ある決断をされたのだと思う。まずはその点、率直にお礼申し上げたい。松江ワシントンホテルの三十三間堂ではじめてお酒を酌み交わした時の味は今でも忘れない。渡辺先生に対して申し上げたいことは多々あるが、ここでつらつら文章にしたためるよりも、一言「ありがとうございました」と申し上げれば、同じ東京人として全て通じるものと一人合点している。渡辺先生おつかれさまでした。本稿を渡辺先生のご退職に献呈いたします。

## 引用文献

池葉須藤樹 1971『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』、私家本。

稲垣寿彦編 1999『陽内遺跡』、庄原市教育委員会。

稲田陽介 2007「林原遺跡から見た山陰地方縄文後期集落の一様相」久保田一郎他編『林原遺跡』、島根県教育委員会。

鍵谷守秀編 1999『船倉貝塚』、倉敷埋蔵文化財センター。

角田徳幸 1998『板屋Ⅲ遺跡』、島根県教育委員

会。
勝部智明他編 2006『原田遺跡』、島根県教育委員会。
神柱靖彦 2002『貝谷遺跡』、島根県教育委員会。
川越哲志・福井万千 1976「豊松堂面洞窟遺跡の調査」松崎寿和編『帝釈峡遺跡群』、亜紀書房。
川越哲志 1978「帝釈猿神岩陰遺跡の調査」広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室編『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査年報Ⅰ』。
河瀬正利 1988「帝釈峡遺跡群の埋葬」『日本民族・文化の生成 1』永井昌文教授退官記念論文集、六興出版。
清野謙次 1920「備中国浅口郡大島村津雲貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究室報告』第五冊。
清野謙次 1969『日本貝塚の研究』、岩波書店。
キージング、R（小川正泰他訳）1982『親族集団と社会構造』、未来社。
久保田一郎他編 2007『林原遺跡』、島根県教育委員会。
小山修三 1984『縄文時代』、中公新書。
坂本諭司・蓮岡法章編 1997『平田遺跡』、木次町教育委員会。
佐々木　謙・小林行雄 1937「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺蹟」『考古学』第 8 巻第 10 号。
潮見　浩編 1971『広島県文化財調査報告』第 9 集、広島県教育委員会。
戸沢充則・堀部昭夫 1976「帝釈寄倉岩陰遺跡―第三次・第四次調査―」松崎寿和編『帝釈峡遺跡群』、亜紀書房。
長岡充展編 1985『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第一遺跡・石州府古墳群』、鳥取県教育文化財団。
中川　寧他編 2005『宮ノ脇遺跡　家の後Ⅱ遺跡 1』、島根県教育委員会
春成秀爾 1979「縄文晩期の婚後居住規定」『岡山大学法文学部学術紀要』第 40 号（史学篇）。
春成秀爾 1980「縄文合葬論」『信濃』第 32 巻第 4 号。
林謙作 1977「縄文期の葬制　第Ⅱ部　遺体の配列、特に頭位方向」『考古学雑誌』第 63 巻第 3 号。
林謙作 1979「縄文期の村落をどうとらえるか」『考古学研究』第 26 巻第 3 号。
林謙作 1980「東日本縄文期墓制の変遷（予察）」『人類学雑誌』第 88 巻第 3 号。
弘田和司編 2004『久田原遺跡』、岡山県教育委員会。
深田　浩編 2002『下山遺跡（2）』、島根県教育委員会。
間壁忠彦・間壁葭子編 1971『里木貝塚』、倉敷考古館。
水嶋稔夫編 1990『御堂遺跡』、下関市教育委員会。
森下哲哉 1996「縄文時代」『新編倉吉市史』、倉吉市。
山田康弘 2001a「山陰地方における縄文時代遺跡研究の展望」『島根考古学会誌』第 18 集。
山田康弘 2001b「中国地方の土器埋設遺構」『島根考古学会誌』第 18 集。
山田康弘 2001c「縄文人骨の形質と埋葬属性の関係」『日本考古学協会第 67 回総会研究発表要旨』、日本考古学協会。
山田康弘 2002a「中国地方の縄文時代集落」『島根考古学会誌』第 19 集。
山田康弘 2002b『人骨出土例の検討による縄文時代墓制の基礎的研究』平成 12・13 年度科学研究費補助金（奨励研究 A）研究成果報告書。

山田康弘 2004a「島根県における縄文時代石器の様相―石器組成を中心に―」『島根考古学会誌』第 20・21 集。

山田康弘 2004b「墓制から見た山地域と沿岸域」『日本考古学協会 2004 年度広島大会研究発表資料集』。

山田康弘 2007「縄文時代の葬制」小杉康他編『縄文時代の考古学』第 9 巻、同成社。

山田康弘 2008「定住生活の始まり」『山口県史 通史編　原始・古代』、山口県。

山本　清 1967「美保関町サルガ鼻・権現山洞窟遺跡について」『島根県文化財調査報告書』第三集、島根県教育委員会。